



鎮守の森だより

NPO 法人社叢学会ニュース

第9号

2004年5月10日

総会・大会開催迫る

5月30日 熱田神宮文化殿で

5月30日(日)に熱田神宮文化殿で開催される今年の年次総会・大会の概要が下記の通り決まりました。参加希望者は5月24日までに事務局へ葉書(〒604-8115 京都市中京区蛸薬師通堺町西入雁金町373番地 みよいビル303号) FAX(075-212-2916) メール(shasou@ams.odn.ne.jp)でご連絡下さい。また懇親会(会費3千円)出席希望者はその旨、ご記入下さい。なお、正会員で欠席の方は必ず委任状をお送り下さい。

時	内 容・講 師	
11:00~11:30	年次総会	
11:30~	シンポジウム	
11:30~12:30	「森は海の恋人」~眺める森から関わる森へ~ 基調講演 畠山 重篤(牡蠣の森を慕う会 代表) 昼 食	
13:30~15:30	パネルディスカッション パネリスト:岡村 穰(名古屋市立大学大学院教授) 嘉田由紀子(京都精華大学教授) 畠山重篤 司会進行:林 進(岐阜大学名誉教授)	
15:30~17:30	研究発表会 鎮守の森におけるイチョウとシュロについて 神社境内地の維持・管理および組織について ~大津氏長等神社、石坐神社・和田神社の氏子の役割と機能を事例として~ 西アフリカ・ギニア「精霊の森」 ~その保全生態学的役割について~ 世界遺産春日大社とともに文化的景観を形成する特別天然記念物春日山原始林の現状と問題点	発表者 沖 益弘 原田多美子 角野幸博 山越 言 前迫ゆり 名波哲 神崎護
17:30~18:30	懇 親 会	

京都市内の社叢に棲む野鳥

講師 橋本 啓史

(京都大学大学院農学研究科博士後期課程2年)

1. 都市街地の社寺林の面積と鳥類相との関係

京都市内を人工衛星から撮影した画像をみると、北部の地域に都市としては比較的良好な林分が社寺林などの形で島状に残されているのが判る。現在、これらの林分の内、約30ヶ所の孤立した林分で鳥類相を調査している。主な鳥として、シジュウガラ・ヒヨドリ・メジロ・キジバトなどは他の都市の公園や小さな林でもよく見かけるが、京都ではヤマガラ・イカル・ウグイス・コゲラ・エナガといった鳥を下町でもよく見かける。

生態学では、都市における島の生態学という研究がここ数十年続けられており、生物の種類と生息地の面積との間に正の関係があることが、これまでに国内外で数多くの場所で明らかにされている。

また、多種の生物を保護するには大きな森林面積を保全するのが良いのか、それとも小面積の樹林を数多く保全するのが良いのか(SLOSS問題)という議論が盛んに行われてきたが、野鳥の場合、小さな樹林に出現する種はそれよりも大きな面積の森林においても出現するという入れ子状の種組成をしていることが多く、また森林の内部環境を好む種は大きな森林にしか生息できないことから、大きな面積の森林を保護することが重要であるといえる。京都は三方を山に囲まれ、また市街地に吉田山・船岡山・双ヶ岡の三つの丘や京都御苑という大面積の樹林があることから、都市内に生息していることは珍しい森林内部環境を好む夏鳥のキビタキまでもが生息している。また社寺林は、下層植生が発達した樹林もあることや、人の出入りが制限された禁足地に暗い森林内部環境が確保されていることが特徴であり、シロハラやベニビタキなどの多様な野鳥の生息環境を提供している。

2. 社叢に棲む夜の猛禽アオバズク

社寺林のシンボリックな鳥といえばフクロウで、大木の樹洞に営巣し、京都の社寺林ではフクロウの仲間のアオバズクが比較的多く生息している。この鳥は夏鳥で5月頃に東南アジアから日本に飛来し、社寺林や山の大木で生息し、10月頃に東南アジアへ帰っていく夜行性の猛禽である。アオバズクの主な餌は大型の甲虫や蛾・セミなどの昆虫をはじめ、小鳥やネズミなどの小動物を食べることもある。アオ

バズクは社寺林の生態系の中で頂点に立つ鳥で、ある意味で社寺林の健全性の指標種といえる。

2002年のアオバズクの繁殖期に京都市北東部の5km四方内の市街地や山裾の社寺林のほぼ全ての胸高直径1m以上の大木を対象に、アオバズクが出入り可能な樹洞の有無とアオバズクの生息可能性を調査したところ、14ヶ所の生息地を発見した。樹洞はあってもアオバズクが生息していない場所が13ヶ所あった。これをもとにアオバズクの生息可能性の有無を予測する統計モデルを作成したところ、巣穴となる樹洞から半径100m以内に1.1ha以上の樹林がアオバズクの生息には必要であることが明らかになった。

また、京都市街地におけるアオバズクの生息数は、1980年代に比べると減少しているようだった。京都市としても大木そのものの保護は比較的行われているが、社寺林の樹林面積そのものが減少しているため、大木はあってもアオバズクが棲めないという現象が起きている。

3. 京都市街地に新たな“社叢”を創る試み

京都市下京区梅小路公園内に1996年に開設された「いのちの森」は、下鴨神社のニレ科樹林の社叢などを目標とした面積0.6haの復元型ビオトープである。100年後には成熟した鎮守の森となることが期待されている。

京都ビオトープ研究会は、この「いのちの森」において8年間継続して鳥類相を記録している。8年間で計52種の鳥類が記録されたが、年間の記録種数は開設3年目以降30種強で横ばいとなった。また、山地や大緑地から孤立していても冬鳥や漂鳥は2、3年という比較的短期間に主な種は飛来・定着するが、留鳥で定着性の強い小鳥類の飛来には時間がかかることが明らかになった。また樹種が多く導入されたビオトープでは果実をつける木も多いいため、特に冬季に樹林面積の割に多くの種類の鳥類が飛来している。しかし繁殖期には、14種の繁殖行動が記録されたものの、園内での営巣は4種しか記録できていない。これは繁殖地としては面積が0.6haでは狭いことや、比較的大きな樹木を最初に導入したものの、若い林であるために樹洞のような営巣環境がないことが関係していると考えられる。

昭和レトロと原風景

講師 品田 穰 (東京農業大学客員教授)

昭和レトロ

江戸100周年を迎え、各地のイベントが盛況を博したことは記憶に新しいところである。

若者の間でも、畳にちゃぶ台という風景があこがれる生活のひとつになり、「昭和レトロ」がブームを呼んでいる。しかしいつの時代にも日本の古き良き時代を求める衝動があるようで、1970年代には「ディスカバー・ジャパン」という古い日本の風景を当時の国鉄がPRするために作ったキャンペーン事業が盛況を博した。1977年頃になると女性雑誌が主唱した「第1次ふるさとブーム」が起こり、地方で田舎料理を食べたり田舎の風景を見る旅行が人気となったのである。また、1985年頃に起こった「第二次ふるさとブーム」を機に全国各地では「ふるさと村」が次々と設立された。

ブームとなっている背景には単なるノスタルジアだけではないものを感じる。何故ならばその時代に生きていなかった人までそういうものに魅力を感じているからだ。

このレトロブームの度に、共通して出てきたキーワードが「原風景」であるという。

昭和レトロの原風景は昭和30年頃、高度経済成長期の直前までの日本の風景を指しているが、その風景を若者の世代では見ている者が殆どいない。しかし見たことのない昔の暮らしや風景に対して時代を超えて“なつかしい”と感じるのは何故だろうか？

原風景と環境

我々が視覚情報として捉える風景は、幾つかの知覚標識と沢山の知覚されていない標識によって成立している。これは人類ならば子供でも大人でもこの構造は変わらず存在する。

一方、ダニには目がない。皮膚の細胞で明るい方を感知し、哺乳類から放出される二酸化炭素の臭い、暖かさなどが環境を知覚する要素である。知覚要素が主体にとっての原風景であるならば、ダニには3つの原風景しかないことになる。ゾウリムシに至っ

ては1つの器官からの刺激のみが原風景であるといえる。

このように物理的存在と生物主体で見た環境というのは主体によってばらばらであるため、その生物により知覚時間が違うように主体のもつ原風景は異なると考えられる。

生物の感じている環境というのは、外的から身を守るため、また餌を捕るため、繁殖相手を見つけるためというように、生物的要求に応じた必要最小限の判別、認識をしている。

この環境の中で人類は何を原風景としているのか、その共通項はあるのか？風景の要素に対して着目し、SD法を用いて調査したところ、最も評価の高かった空間は、背後に森を配し、前方に開けた見通しの良い空間であった。作用標識として何故安らぎを感じたのか。それは外的防衛機能感が、進化の過程で形成されたためと考えられる。

いつの時代も人間が生きていくうえで有形・無形の外的から身を守ることはまず初めに解決しなければならない問題であった。防衛に関する作用標識を中心に人間の原風景が形成されても不思議ではない。

その証拠にかつての村はほぼ同じ構造をしている。里の近くに鎮守の森があり、里山があり、前にはノラ(畑や田んぼ)があり、村はずれには辻きりがあり...、という風景がふるさとの原型であり、我々が共有している原風景である。即ちふるさととは安全の領域であったといえる。

これは効率化を目指して都市化が進みこの構造が崩れた現在にも、遺伝子情報として組み込まれているのではないだろうか。ここに原風景が単なる古いものに対するノスタルジアではない、生物の根源に関わる問題が含まれていると考えられる。原風景が失われると、我々は潜在的にそれを求め、自らの原風景と重ね合わせて懐かしいと感じ、時代を超えて「昭和レトロ」ブームにつながっているのである。

(文責：本多麻衣)

次回予告(第11回関東定例研究会)

日時：2004年6月26日(土) 14:00~17:00

場所：東京農業大学・世田谷キャンパス 18号館1階1811教室

(世田谷区桜丘1-1-1 03-5477-2428)

テーマ：秩父神社・ははその杜を読む

講師：大澤 太郎 (森林インストラクター、埼玉県森づくり課勤務)

bookbookbookbookbookbookbookbookbookbookbook

書籍紹介

bookbookbookbookbookbookbookbookbookbookbook

『全国一の宮めぐり』

一の宮は平安中期から中世にかけて、国ごとに確立されてきた国第1の社格で、一般に有力社神順に以下二の宮、三の宮、四の宮という順がつけられた。しかし、時代の変化にともない神社の勢力に盛衰が現れると、新しい勢力を得た神社が一の宮として信仰されたり、同国内で2社が一の宮を称した例もある。

本書は「全国一の宮会」に参加している神社を網羅し、さらに歴史的に一の宮と証されている神社を加え、北海道から九州へと順に計104社を収録して。各社とも主祭神と歴史とゆかりの人物、祭礼、授与品、郷土の名産品などを簡潔に紹介している。

学習研究社・定価1,900円(税別)

事務局から

- トップページでも記させていただきましたが、正会員の方には5月30日開催の「平成16年度社叢学会総会」の出欠葉書を同封させていただきました。返送期日は5月24日となっておりますが、できるだけ早くご返送いただきたくお願い申し上げます。
- シンポジウムで基調講演をされる畠山重篤氏は1943年に中国上海で生まれ、現在は三陸リアス式海岸に位置する宮城県気仙沼湾でカキ・ホタテの養殖業を営んでおられます。フランス・ブルターニュ地方やスペイン・ガリシア地方を訪ねた体験を通じて、森、川、海の関係の重要性に気づき、89年に「牡蠣の森を慕う会」を仲間とともに立ち上げ、漁民による植林活動を続けておられます。海と森の豊かな関係について実践にもとづいた興味深いお話が伺えます。奮ってご参加ください。

- 平成16年度の会費を納入いただいた方には今年度の会員証を同封させていただきました。継続会員の方は前年度と同じ会員番号となっておりますが、会員分野を変更された方(例えば市民会員 正会員)は新会員番号となっております。なお、会費未納の方は、学会活動をより円滑に運営するためにも会費の納入をよろしくお願いいたします。

- 昨年、大津における社層調査を行った社叢学会大津グループが、その調査活動を踏まえて、滋賀県内の鎮守の森を守り育てることを目的に「淡海の杜の会」(仮称)を発足させることになりました。設立総会並びに記念講演会は下記の通りです。なお、記念講演の講師は社叢学会の顧問でもある宮脇昭氏(財団法人・国際生態学センター研究所長)が「鎮守の杜をまもり創れ～近江から世界へ～」と題して講演します。

(要予約・資料代500円)

日時 平成16年5月23日 13時30分から

場所 近江神宮内 近江勸学館

問い合わせ先 06-6308-3921(森川稔)

編集後記

桜の季節も終り、連休も終り、観光客も一段落するのかなあ。でも、もうすぐ葵祭だなあ。そうすると、あっという間に祇園祭になって、もーれつに蒸し暑い京都の夏に突入するのかなあ... 全編が貴族のぼんぼんの恋愛ゴシップ尽くしたる源氏物語も、読んできると、そりゃあ優雅でうっとり! なんだけど、考えてみればあんな長い髪で、何枚も着物を重ね着して、うっへ～ 汗臭あ などとついつい無粋なことを。涼しげなしつらえもいいんだけど、京都の夏は気分で凌ぐにはいささか辛いものが... 特にこの事務所、西陽の日当たりのいいこと。隣のビルの陰に日が沈む4時半頃までの2時間ばかり、何しろ窓が大きいもんでお日様さんさん。え～ん、UVカットカーテン吊ってくれ～い!

(藤岡 郁)

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区蛸薬師通堺町通西入雁金町 373 番地
 みよいビル 303号 TEL075-212-2973 FAX075-212-2916 E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
 社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋 2-36-1 ソフトタウン池袋 1101
 TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail shasou@macrovision.co.jp